

空也誄くうやるい

神野麻郎

（将来閻魔大王の前で、もし問われたなら、私はこんなことも話してみようと思っ
ている——）。

初めに武藤とは相撲をとった記憶があります。そのころ私はまだ小学一年か二年で、
武藤はもう立派な体躯の青年でした。路地の一隅で、「さあ、かかってこい！」とかま
える武藤に、私も含めて子供たち数人がひよこの群れのように押し寄せるのです。そ
れでも武藤には歯が立たず、子供たちは次々にはじかれたり、路面に投げ飛ばされた
りするのでした。そうして皆を倒すと、武藤はどうだと仁王立ちになって声をあげて
笑うのです。二枚目の映画俳優のような美しい顔がやや上気しています。そしてまた
余裕綽々のていで、「どうした？ さあ、かかってこい！」と言うのです。何度かかかっ
ていき、倒されているうちに、私は涙ぐみそうになったことがありました。いや、べ
つに悲しかったわけではないのです。むしろ嬉しかった。その時の心理は私自身にも
よくわかりませんが、しいていえば私は武藤が好きだったのです。それも、おかしな
ことですが、後年味わった恋心に近い感情でした。たかだか六、七歳の少年が、立派
な大人に見えた青年に思春期に似た心のうごめきを感じていたのです。だから、武藤
に相手してもらって、感激して涙ぐんだというわけです。そのころからすでに私は
孤独だったのでしょうか。それともそのころの武藤に魅力がありすぎたのでしょうか。
それはすべてが色あせた写真のような、昔の島での記憶です。そのころ武藤はすで
に島、紀伊水道に浮かぶ齋島さいまという孤島ですが、そこを離れていましたが、島に武藤
の母親が住んでいてたまに帰ってくるのがあったのです。家が近く、武藤が帰って
きたと知ると私は興奮してすぐ会いに行きました。武藤は言葉はいささか乱暴では
が、私を見つけると「おお、ヨシか」と気安く声をかけてくれました。子供相手によ
く冗談も言い、それで武藤——テツちゃんちんは近所の子供たちに人気があったのです。
それに言葉や身のこなしに島の青年にはないどこか洒落た感じ、いわば街の雰囲気
を漂わせていたのも子供たちを惹きつけた理由だったでしょう。ふだんは武藤の母親一
人が静かに暮らしている古屋の畳に寝転んで、満ち足りた気持ちで武藤とそこの古
い雑誌や漫画本をめくっていたこともありました。開け放した障子と畳に夕日があた
っていました。隣の部屋で武藤の母親が黙って横になっていました。

その母親というのは、目つきの鋭い、めったに笑わない人でした。「お咲さん」といいましたが、そのころ何歳であったのか、痩せて灰色の髪だったので、私の目にはもうかなりの老婆に見えました。島の女らしくなく、蠟のように白い顔でした。夫はいないようでした。島には男を遠くへ出稼ぎに出して留守を守っている女は珍しくありませんでしたが、そうした家にもどことなく漂っている男のおいがお咲さんの家にはなく、武藤がいなくときはお咲さんただ一人でした。そこには人のおいよりも、古家特有の、壁土や木の體えたようなにおいがしました。私は父母に言われて、よくお咲さんの家に届け物をしました。それらはささやかなもので、その晩のおかずであったり、貰い物の一部だったりしたのですが、お盆や風呂敷包みを落とさないように気を使いながら狭い路地を縫っていき、立て付けの悪い入り口の障子戸を開けて声をかけると、お咲さんは決まってどこか具合が悪そうな陰気な顔つきで出てきて、口数少なく応対するのです。尖った鼻と鋭い眼差しがとっつきにくい感じで、島の他のおばあさんたちとはだいぶ違っていました。近所づきあいもありしないようです、いつも家の中にこもっていて、何か仕事をしているふうでもありませんでした。私はものごころついて、「不幸」という言葉を、現実には初めてこのお咲さんの上で考えたような気がします。といて、そのころの私が、お咲さんの身の上についてそれ以上に詳しく知っていたわけではありません。

武藤の家はそんなふうに親一人子一人のようでしたが、でも親子の仲はよくなさそうでした。たまに武藤が帰ってきて、二人はよく口喧嘩をしていました。用があつてかなくてか、お咲さんの家に近づく二人が声を荒らげてのしりあっていることが多かったのです。その時ばかりはお咲さんの、甲高い、いきり立った声が聞こえてきました。武藤の太い声も怒りを隠していません。母親が責め、息子が言い返しているふうでした。また、その反対のようでもありました。島は漁村でもともと言葉も気性も荒く、またそのころは高度成長期の前で戦後外地から引き揚げてきた人々も呑みこんで島には人が余り、多くが貧しさに押しひしがれながら暮らしていた時代でしたから、親子、兄弟、夫婦、嫁姑の喧嘩や酔っ払いの騒動はしょっちゅうでした。ですからとくに武藤親子の口喧嘩が目立ったわけではありませんでしたが、障子戸を通して聞こえてくる激しい諍いは幼い私にはやはり驚きで、家の入り口に立ちすくむほかはありませんでした。

またわが家でも不思議なことがありました。ある時父親が、「哲次とはあんまり遊ぶな」と私に言ったのです。父親は朝鮮からの引き揚げ者でしたが、戦争期に本土の旧制中学も出ていたので、戦後役場の吏員となり、そのころは島の出張所に一人で詰めていました。で、仕事の関係もあったのでしよう、一人暮らしのお咲さんには親切にしていましたし、武藤のこともだいたい気づかっていたようでした。その父親が、声をひそめて、「哲次とはあんまり遊ぶな」と注意したのです。幼い私にはわけがわかりま

せんでしたが、親を不審がると同時に、何となく、いつもの明るく美しいテツちゃんの笑顔に翳がさしたようでした。

でもこの不審は、やがて苦い思いとともに解決しました。ある日武藤のことが新聞に載ったのです。その紙面の片隅の記事を読み取った父親が言うところによると、武藤が県庁所在地の街で民家に押し入って強盗をはたらき、すぐにつかまったと伝えていました。父親は「またアホなことやって！」と吐き捨てました。父親のところにはすでに当局から武藤の身分の照会があつたようでした。事件をお咲さんにすぐに知らせ、慰めたのも父でしょう。狭い島ではこんなニュースはすぐに伝わり、島の大人たちが顔を合わせると話題にして眉をひそめた、それは何となく子供たちの世界にも感染してきた、そんな雰囲気をおぼえています。お咲さんはますます家に引きこもっているよりないのです。

私は複雑な気分でした。まず、強盗という事件そのものが信じられませんでした。あの子供たちにやさしい、堂々とした、陽気な、美しいテツちゃんが、実際にそんな悪事をはたらくはずがない、何かの間違いではないか、と子供らしく考えました。あの武藤が暗い目つきで暗い心を燃やしてどこかの知らない家に押し入る場面など、到底想像できなかったのです。もしそれが本当だつたら、とも考えました。もしそれが本当だつたとしたら、何が原因なのか。武藤はほんとうはどういう人間なのか。そして、人間の心とはいったいどのようなにできているのか。その事件をきっかけに、幼いながらも、私はそんな大きな、解決不能の疑問にとらわれたように思います。

また、もっと实际的に武藤の身の上の心配もしました。いつか島で二人組みの泥棒がつかまつたことがあります。全戸が親類のような狭い島ではどの家も鍵などかけません。またそのころはまだ社会全体が貧しく、わずかな金品目当てのこそ泥も多かった時代です。しかしわざわざ貧乏な島を狙ってやってきて捕まつた泥棒のほうこそ災難でした。島には警察がありません。そこで船で一時間もかけて市の方から警察がやってくるまでの間、その二人組みは島の男たちに文字通り袋叩きにされたのです。漁業組合の前の広場の暗い電灯の下で、棒を持った島の男たちの怒号と暴力と嗤いにさらされ、二人組みは顔から血を流しながら身を寄せ合つて濡れ鼠のように震えていました。それで、つかまつた武藤もあんなふうに殴られたり蹴られたりしただろう、身体は大丈夫だったか、と心配したのです。

武藤についての二つ目のあざやかな記憶は、私が小学校の五年生だつた夏休みのことです。そのころ、久しぶりに島に帰ってきてぶらぶらしていた武藤が、ある日、私をお山に行こうと誘ってくれました。武藤にまとわりつくようにして山道をたどりながら、私はいささか得意になっていました。そのころの私にとつても、武藤は街の雰囲気を身につけた、恰好の良い、あこがれの兄ちゃんでした。その兄ちゃんからお山

への道連れに自分が選ばれたのです。

お山は島の北端にあります。斎島はおよそ本島と二つの無人島からなっていますが、集落は本島の南端にかたまり、その反対の側にお山があつて頂きに観音像を祀っているのでした。やはり観音像を本尊としている松林寺は集落のへりにあるのですが、その奥の院が「お山のお観音さん」で、島では奥の院の方が本来なのだと言っています。島の人は皆お山のお観音さんに親しんで、祭礼日はもちろん、願掛けやお礼参りに、片道一時間ほどの山道を歩いてたどります。島外に出ている人たちが久しぶりに帰島したときにも参詣するので、武藤がお山に出かけるのにも何の不思議もありませんでした。

武藤が次々にとぼす冗談に笑いころげながら、私は山道をたどっていきました。「お地藏さん」までは登りで、そこからは急な「八丁坂」を下り、水田も広がっている「野辺」の石橋を渡ると「お山」のふもとです。暑い、明るい日でした。山では蝉が鳴きしきり、野辺の田圃や葭原ではトンボや蝶が舞っていました。私は捕虫網を持ち、それらを追いつつ進みました。道々二人で話したことはもうおぼえていませんが、ただ一つ、武藤がお山の観音さんのことについて詳しくあったことが頭に残りました。たぶん、その時こんなふうには武藤は言ったのです。

「ヨシ、おまえ、クーヤショーニンで知つとるか？クーヤショーニンというのはな、昔、昔のえらいお坊さんじゃ。そのクーヤさんが梅檀木せんだんぼくに乗つてこの斎島にやつて来たんじゃ。そのころは、まだ斎島は無人島だったかもわからん。海賊の島だったかもわからん。こんな道もなかっただろうよ。でもクーヤさんはわざわざこの斎島に来て、お山に登つて修行した。そして乗つてきた梅檀木にお観音さんを刻んで祀つたんじゃ。それがこのお山のお観音さんの始まりというわけよ。ありがたい話だろ。ヨシも、もうほれくらいのこと知つとけよ」

クーヤショーニンと聞いても、そのころの私には何のことかまるでわかりませんでした。ただ、武藤のそんな知識を意外とも、すごいとも感じました。

「だからここのお観音さんはな、そんじよそこらのお観音さんとは格が違うんじゃ。今でこそ寂れとるようじゃが、戦争の前までは島の外からもようけの人がお参りに来よつたもんじゃ。ふもとの通夜堂つやどに泊まる人もいっぱいおつた。

ワシはな、子供のころ、お観音さんに初めて連れていってもらたときは怖かつたんぞ。おまえも知つとるだろ、お観音さんのお厨子の前には鏡が置いてある。その鏡は、人がすることを何でも写す。ええことも悪いこともな。そう言うて、大人は子供を脅すけんな。怖かつたんじゃ。ほなけんどな、ある時、夢に、お観音さんが現れたんじゃ。おまえ、信じられんだろうけど、ほんまのほんまのこつちゃ。おまえやけん、言うたるけんどな。

こう、全体が青紫に透き通つた感じで、宝石みたいに輝いとつてな、きれいなんじや。あんなん、見たことないわ。ほして、全然怖い感じはのうて、やさしいお顔をし

とられたんじゃ。何でも許したる、おまえのしたことは何でも許したる。安心して生きたらええ。私はいつでもおまえを見守っとるからな、そんなふうにおっしゃるんじや。ありがたいだろ。何とありがたいお観音さんじゃ、とワシは思った。涙が出たよ。覚めてからも涙が出た。夢とばかりは思えんかった。年寄りが、よう夢のお告げと云うだろ。あれじゃ、と思った」

この不思議な夢のお告げの話を、私は武藤の何とはない孤独な感じとともにおぼえています。そのころたまに島に帰ってきてても、武藤が親しくつきあう大人や青年はほとんどいないようでした。漁や寄り合いやの島の生活のリズムからも武藤だけははなれていくようでした。そのうえ、母親のお咲さんとも相変わらず仲が悪いのです。だから武藤の孤独な心はお観音さんに向かったのではないか、子供心にもそんなことを直観したのです。

「それで、ワシはな、もっとお観音さんについて調べてみようと思った。市や県の図書館にも行ってみた。もの識りにも訊いてみた。で、いろいろわかったんじや。まあ、ヨシにも、もうちよつと大きいなったら教えたるわ」

「調べてどうするん？」と、私はそれなりに興味を惹かれて訊いたような気がします。「本を書くんじや。クーヤシヨーンやお山のお観音さんのことを本に書いて、ほんまのことを島の連中に教えたるんじや」

武藤のこの言葉は、その時の少し照れたような笑顔とともに長く記憶に残りました。「本を書く」とはすごい。何の本であれ、「本を書く」などということは島の大人の誰も思いもつかない、誰にもできないことは明らかでした。それを武藤がやってのけようというのですから、私はまた武藤をあこがれ、尊敬する種を見つけたわけです。武藤が島の大人たちからも同輩の青年たちからもよく思われず、相手にされていないことはそのころの私にも何となくわかってきていました。あれはヤクザもんじや、チンピラじやと島の大人たちはいのです。でもその本ができあがれば、そんな見方も吹っ飛んでしまうにちがいない、口さがない島の大人たちを見返してやることができる、そんなふうにも思われました。で、私はその時、武藤のこの言葉をしっかりと頭に刻みつけておこう、また他人には絶対に話すまいと小さな決意をしました。なぜなら、その時から、私だけが武藤のもっとも大事な秘密を共有したように思えたからです。

蟬時雨のお山を登り、頂きの観音堂に着くと先客がありました。ふと武藤はお堂の手前で踵を返し、横手の椎の大林の中に入っていました。先客とは顔を合わせたくないようでした。私たちは蟬をとったりしながらしばらく林の中で時間をつぶし、引き返すともう誰もいないお堂に入り、線香をあげ、祈りました。武藤が年寄りたちのようにお経を難なく口ずさむのが意外でした。お堂の裏手はすぐ、百メートル以上の高さのある崖です。上に立つと、足もとからごうごうと潮騒が這い上がってきます。海原に向かって小石を投げても崖の途中の木々にすぐ隠れてしまつて音も返ってきま

せん。武藤はそこに祀られている石仏にも賽銭を置き、真面目な顔で合掌していました。

帰りはもう一つの「三十三番」の道を、やはり武藤にまつわりながらたどりました。お参りを果たしたせいも、武藤は清々しい顔をしていました。「三十三番」の道は小暗く、木隠れに古い石仏がいくつも散在していてふだんは気味が悪いのですが、武藤といっしょだと少しも怖くはありませんでした。

その数日後だったか、また私は武藤に誘われました。今度は学校の図書室に行こうというのです。学校までの田圃道を歩きながら、

「図書室や行って、どうするん？」と私は心楽しく尋ねました。

「本読んで勉強するんじや」

「お観音さんのこと？」

「まあ、ほうじや。学校の図書館にもええ本があるかもしれんけんな」

「本、書くんじやな。いつごろ、本できるん？」

「ほうじやな。まだちよつとかかるわ」

学校は休暇中のこととて、運動場も校舎もひっそりしていました。宿直の先生の姿も見えません。私はかまわず、中学校の校舎の二階にあった図書室に武藤を案内しました。暗い部屋に入って、明かり取りのために、閉め切られた雨戸を一枚開けました。そのころ島はまだ自家発電で、明け方の出漁時と夕方から午後十時までしか電気が灯らなかったのです。武藤が棚から数冊を取り出して窓際の椅子に座って読みはじめたので、私も適当に本を見つろって机の上に広げました。そのころ熱中していた天体の本や、トム・ソーヤーか何かでした。それからしばらくは私には退屈な時間でしたが、同時に至福の時間でもありました。大好きな武藤の秘密に、たった一人で付き合っているわけでしたから。

武藤は何度も書棚の方に立ちました。しばらくして、「これ、借りていつて読むことにするわ」と大小数冊の本を持参の布袋に収めました。そして、
「ヨシ、本を借りることな、先生にはワシから言うておくからな、おまえはなんも言わんでええぞ」とつけ加えたのです。児童や生徒なら本の借り出しに手続きが要るくらいのことはそのころの私でも知っていましたが、大人なら武藤の言う通りでよいのだらうと、私はその言葉をまったく疑いませんでした。

その夏休みには、もう一つ思い出があります。齢のだいぶ離れた従兄の船に乗って、武藤と三人で貝獲りに行ったことです。武藤は定職がなくぶらぶらしていたので、私の父が自分の甥の船に乗るように世話をして、その夏の一時期、武藤は海士をやったのでした。

島は昔から海士の漁が盛んな所です。春から秋にかけて、男たちが海にタルを浮かべ、素潜りでアワビやサザエを獲るのです。島の子供だった私も、夏の間は近くの海

に潜って貝を獲ったり、魚を銚で突いたりすることに熱中していましたが、大人の漁船に乗って出かける機会はあまりありませんでした。その時は、やはり武藤に惹かれて従兄の船に乗ったにちがいありません。

従兄の船は島の東側に廻ると、ある岩礁の間でエンジンを止め、錨を下ろしました。従兄と武藤は揺れる船の上で早速、風呂にでも入るように、無造作に着衣を脱ぎはじめました。舳先近くに座っていた私の視線は、思わず武藤の身体の方に惹きつけられました。美しかったのです。従兄と武藤は年齢は同じくらいでしたが、華奢で浅黒い従兄に比べて、武藤は体格も立派で朝の日差しを受けた白い皮膚がつやつやと輝いていました。私は偶然女の裸でものぞいたようにきまり悪く、視線をそらしました。後にも先にも、私が男の肌をそんなふう感じたのは、この時よりほかに思い出せません。私はやはり武藤に恋心に近いものを感じていたのでしょうか。でもそれはなぜだったのでしょうか。

「ヨシは潜らんのか」と武藤が笑いかけてきました。私はとっさに強く首を振りました。島の子供としては情けないことでしたが、まだ小学生の私はとてもこんな波が群れて騒いでいる、底の知れない海に入って自由に泳ぎまわる自信はなかったのです。「ヨシはまだよう泳がんのじゃ」従兄が遠慮なくからかいました。

二人は素裸になると、今度は褌を締め、そこにアワビ用のノミを挟み込みました。そのころはまだ島の海士はウエットスーツもシュノーケルも使わず、水中眼鏡をつけるだけで、褌一丁で昔ながらの素潜りをやっていたのです。二人は少し離れた海面に威勢よく木のタルを投げると、ずぶりと青い海面に躍りこみました。それから各々タルまで泳ぎ、敏捷に身体を逆さまに返して潜っていききました。二人とも、いったん潜ると長い間上がってきません。潮を吹いて上がってくると、たいていアワビかサザエをつかんでいて、それをタルに付けた網の中に落としていくのです。私は舳先に座ったままで、二人の動きを何となくながめていました。いや、気が咎めるようで、武藤の方はあまり見られませんでした。波に揺られながら、私は船の上で真夏の暑熱に焼かれそうでした。見上げると黒々とした崖が直立してせりあがり、その高みには松の木や枝などがうねっています。岩礁の向こうに、海原と水平線がけぶっていました。暑かったけれども、後から思えば、それも私にとっては幸福な時間でした。

その夏は二、三度、そうして従兄の船に乗ったような気がします。しかし、武藤の海士の仕事は長続きせず、いつの間にかまた島にいななくなっていたのです。従兄は何くわぬ顔つきで、また一人で漁に出るようになりました。どこへ行ったのかと父に聞くと、

「さあ、わからん。またお咲さんと喧嘩して飛び出していったんじゃ。島におって、仕事して、親孝行してやればよいのに。アホな奴じゃ」とため息をつくばかりでした。従兄と同じくらい、あんなに達者に貝を獲っていたのに、と私も惜しいと思

ました。ただ、父の言うようにお咲さんとはやはり仲が悪いようでした。私は見ませんでした。ある晩は武藤が酔っ払って、「おまえ、殺したるか！」とわめきながらお咲さんを追い回したこともあったそうです。

九月になって新学期が始まりました。朝会での校長先生の話の中に、「図書館の本がたくさんなくなっている。けしからんことである。心当たりのある者は何でも、後で職員室まで言ってきたさい」というのがあって、私はどきりしました。休み中の武藤とのことが思い出されました。でもすぐ気にならなくなりました。だって、武藤は本を借りたことを自分で先生に断ると言ったのだ。それも、島を出ていく前に、もう返しているはずだ。それに、武藤は「たくさん」は借りなかった。数冊袋に入れていただけだ。本は何か別のことでなくなってしまったのだろう。いくらか晴れない霧のようなものは頭の隅に残ったものの、私にはそうとしか考えられませんでした。だからその後で、担任の若い教師からそのことで呼び出され、訊かれた時も、私はむしろ腹を立て、「なんも知らん」と言い張りました。私はまだ武藤を深く信じ、崇拜していたのです。そしてそんなことがあったので、武藤が秘密のように打ち明けてくれたこと、早く武藤が本を書き上げ、世の中に出して皆を驚かすことをよけいに強く待ち望むようになりました。このひそかな期待は、それから誰にも告げることなく、私の中だけで永く続いたのです。

「哲次がああなっしてしもうたのは、お咲さんのせいかもわからん。お咲さんも、もつと哲次をかわいがってやればよかった」と、ある夜父親の声が聞こえてきました。台所で寝酒を呑みながら、母親相手に武藤のことを話していたのが、弟と一緒に別の部屋で寝ていた私の耳に入ってきたのです。

聞いていると、母子の事情がある程度わかってくるようでした。後年知ったことも含めると、おおよそこんなことのようにでした。

お咲さんは若い時大阪に出て料理屋に勤めた。小綺麗な娘であったので、そのうち言い寄る男も何人かあり、同棲や結婚や離婚を繰り返しているうちに子も三人なしたが、その末の子供が哲次である。父親はお咲さんが水商売をしているときに最後に持ったという京都の旦那で、武藤という島ではただ一つの姓もその人のものである。その事業家の旦那は、戦争中「二号」のお咲さんと哲次を満州まで連れて行き、向こうの大きな街でお咲さんは小料理屋のおかみなどをしたりして一時期は羽振りの良い暮らしをしていた。しかしやがて旦那が死んだか捨てられたかで、戦後まもなく生まれ故郷の島に哲次だけを連れて戻って来た。その時は、荷物といえば身の回りのものを包んだ風呂敷包み一つしかなかった。誰もが貧しかったその時代、武藤親子も例外でなく食べていくのに苦労をした。しばらく親戚や網元の家の賄いや子守などをしていたが、すでに持病があつてあまり詰めては働けなかった。男をとつかえひっかえした

多情な女として周りの見る目は厳しく、身内でさえも援助を拒み、むしろ厄介者としてつらく当たった。私の父親によれば、「それで、お咲さんは哲次をよういじめた」、「自分の身のつらさを全部子供に当たった」そうです。引き揚げてきた当初は、哲次はまだ小学生だったでしょう。叩いたり外にほうり出されたり、子供の哲次はしょっちゅう泣いていた。そうして母親にいじめられたから、哲次はまともな人間に育たなかった、ぐれてしまった、と私の父親はいうのです。

その夜の父の話は、私はその時の自分の感情とともによくおぼえているのです。別の部屋に寝てそれを聞きながら、私は枕を涙で濡らしていました。弟がそばで何ごころなく眠っていました。その弟に背を向けて私は嗚咽しました。母親に愛されない子供、実は私もそうだったので、武藤のことがとても人ごととは思えなかったのです。母親につらくされて身も世もなく泣くしかない子供の武藤、泣きながら幼な心にかはこいつをやつてやると復讐を決意するしかない子供の武藤の気持ちがよくわかるように思えたのです。

私は幼時病弱で、人一倍手のかかる子供でした。よく喘息の発作を起こしたり高熱を出して引きつけたりした私を、母は連絡船で岬の村や町の医院まで連れて通ったそうです。当時、連絡船での往復は一日がかりでした。ただでさえ忙しかったのにおまへのためによく泣かされた、死ぬ思いだったと、後年母は繰り返し憎らしげに口にするのでした。島で盆踊りのあった夕方、弟といっしょに浴衣を着せられながら、私は裾の方に待針が何本もついたままなのに気づきました。それを言うと母親は、「ヨッチャンを殺してやるかと思とったんよ」と言って笑うのです。私はぞっとしました。まったくの冗談には聞こえなかったのです。ある夜更け、オモテの部屋から、「おまえはトオルばかりかわいがって、どしてヨシをもっとかわいがってやらのじゃ」と母親をなじる父親の声が聞こえてきました。「ほなって、ヨシは好かんもん。かわいくないでえ」という声が続きました。私はその時とくには衝撃は受けなかったようでした。表面は平静をよそおっていられました。母親が弟のトオルばかりかまって私を遠ざけていることは日常のことだったからです。でもそんな親のささやかな会話を、こんなふうにいっまでも忘れられないということ自体が、実際には心の深みが傷ついたことの証拠なのでしょう。

私の方も泣き寝入りするばかりでなく、小学を卒業するころまでは母親によく歯向きました。執拗に反抗する私に対して、母親はヒステリックになじり、よく叩きました。自分も涙しながら母親に手を上げることもありました。やはりひどく叱られて、泣きながら集落を抜け、校庭の闇の中に走り込んでうずくまり、やはり引きつったように泣いていたことがあります。その時考えたことは、今でもはっきりおぼえています。「今に見とれ！俺がもっと大きいになったら、必ずあいつに仕返ししたる！必ず、よっぽど仕返ししたるんじや。ほなけん、今日のことは、いつまでも、大人になって

も、決して忘れんようにしよう」。

私は母に容れられない分、母方の祖母を慕ったようです。そのころ祖母はまだ元気で、裁縫や畑仕事に精を出すかたわら、遠くに出稼ぎに出た伯父夫婦に代わって二人の孫を育てていました。私はその祖母の家に遊びに行くのが好きでした。この祖母はまた、熱心な信心家で、観音さんやお大師さんをいつも祀っていました。若くして、神主だったという夫を病気で亡くし、長男も戦争で亡くしたことも因となっていたのでしょうか。私はこの祖母から島の信仰の雰囲気を学んだのです。

私はまた、三歳下の弟をよく苛めました。今でも私の弟は、「子供の時分兄ちゃんにはよう泣かされた」と言って笑います。なぜそうしたのか、その苛めの心理の仕組みは、子供の私にもよくわかっていました。ある晩、親たちが留守なのをよいことにやはり弟に手を上げてひどく泣かせていた私は、その心理の仕組みがあまりにもあからさまに見え透いてしまい、すると目の前で「死んでやる！」と叫びながら泣きじゃくっている弟がひどく哀れに思われてきて、情けなくなつて私も号泣せずにはいられませんでした。

一方私の父親という人は、幼いころには子供の勉強に厳しいだけの怖い人でした。実際はおだやかな好人物だったのですが、幼い私にはそれはわからなかったのです。小学生の間、私は週末毎に父親の前に正座させられ、一週間分の学校のテストを見せなければなりませんでした。それは私にとってまったく恐怖と拷問の時間でした。百点でも褒められることはなく、七十点以下なら必ず叱られ、殴られたからです。父親の前でも私は何度泣いたことでしょうか。おかげで私は島の子供たちの中では珍しく学校の勉強をまじめにしました。それで義務教育の間、私はいつもいわゆる田舎の優等生でいられました。

しかしここでは、私の子供時代について語るのが本意ではありません。私のことは今はこれくらいにしておきましょう。ただ、武藤もまた母親に愛されない子供だったと知って子供の私はその意味、いや感情をよく理解したということ、そして武藤にさらに親しみをおぼえるようになったということをおきたかったです。もっとも、私の場合などは世間によくあることで、武藤の場合の比ではなかったのかもしれない。愛情抜きであったにしても、私の母親はともかくも私が成人するまで、世間並みに、あるいは外見にはそれ以上に、この扱いにくい、ひねくれた子供の面倒を見てくれたのです。武藤の場合はどうだったのか――。

後年、私は心理学の本で、子供の人格形成上、幼年期の母親との関係がいかに大切かということ学びました。母親との関係がその子供の作っていく後の人間関係の土台となる。子供にとって母親は存在の根拠であり、神話上の大地母神にも匹敵する。ともかく自分の存在や行為を全部肯定してくれ、受け容れてくれる存在、それが母親だ。そんな記述を読んで、私は体験的に、残念ながら主に裏側から、納得したのでし

た。

私が中学一年を終えるころ、父親の転勤で私の家族は島を離れ、市の中心部の町に引っ越ししました。そしてその秋、父親は借金をして郊外に狭い土地を買い、家を建てました。私も二階の一室に初めて自分だけの部屋をもらいました。

武藤がそのわが家を訪れたのは、その次の年の秋くらいのことではなかったかと思えます。来訪は夜遅く、突然のことでした。それも武藤一人ではなく、若い女を連れていました。二十歳過ぎくらいの女は、濃い化粧に派手な身なりで、あまり喋らず、武藤に身を寄せて低く笑ってばかりいました。武藤は少しやつれたように見えました。スーツを着こなして髪もきれいに整え、男っぷりは相変わらずでした。父親は突然の来訪を歓迎し、親切にもてなそうとしました。もちろん、私も再会を喜びました。

武藤の方でも、「ええ、これが、ヨシか。大きいなって、見違えたのう」とおおげさに言って笑いました。そういえば島で会っていたときから、もう四年も経ち、私は中学三年生になっていたのです。

ビールを飲みながら、武藤は磊落な調子で羽振りのよさそうなことを喋り続けました。父親は人のよい顔をして、「ほう。ほう」と受けていました。何か事業を起こして成功しているような話で、私も武藤は島を出て苦労したのかもしれないが、今は立派になったのだと嬉しく、また誇らしく思いました。それで、連れの若い女はある所で悪漢に襲われていたのを、ワシが救ってやったのだという、ヤクザ映画もどきの武藤の話もそのまま信じたのでした。もともと、映画にしては、武藤は依然として映画スターのようでしたが、女の方は目鼻立ちも性格もまったく役不足に見えたのでした。

次の日は休日で、武藤と女は遅く起き出すと、ちよつと買い物をしたというので私が近所のマーケットまで案内しました。途中で武藤は、私が学校の成績がよいのを父親から聞いたと言い、将来何になるのだと訊きました。私はあいまいに笑っただけでしたが、私の方からは武藤に訊きたいことがいっぱいあるような気がしていました。しかし、女連れだし、また思春期に入っていた私は気恥ずかしさが先立って以前のような気楽さで武藤に話しかけられませんでした。ようやく一つ、左手の小指はどうしたのか、と訊きました。左手の小指の一部が欠けていることが昨夜から気になっていたのです。「おう、これか。これは機械をさわって、事故でな」と武藤は何でもなさそうに答えました。またもう一つ、本はどうなっているのか、と訊いてみました。すると武藤は、「本？」とけげんな表情をしたのでした。そんな反応は私の方にこそ意外で、あの島で書くと言っていた本、クーヤシヨーンニンのこと、観音さんの本、と追いつがりました。武藤は、「クーヤシヨーンニンのことは知ってるが。本書くって、ほんなこと、ワシが言うたか？ほうか。忘れたよ」と少し困った顔をしました。強い香水のにおいを道にも撒き散らしながら、武藤の腕にしなだれかかって歩いていった女が、

「あんたが本書くって？」といって、甲高く嗤い出しました。私は女に腹が立ちました。でも武藤も調子を合わせて、「ヨシは妙なことをおぼえとるなあ」と言って笑うのです。全く記憶にないという口ぶりです。私の頭は混乱し、言葉を継ぐ元気をなくしました。

買い物から帰ってくると、二人はすぐまた出かけ、夜遅くまで帰ってきませんでした。翌日は、共稼ぎの両親も学校のある私も弟も朝早く家を出ます。武藤と女は遅く起き、昼ごろに去ったようでした。

その夜、いくつかもが無くなっている、と母親が父親に訴えていました。目覚まし時計や化粧品や万年筆といった小物でした。両親は武藤のしわざだ、恩を仇で返したと憤っていました。その時も私は、すっかり武藤を疑ったわけではありませんでした。何かの間違いだと思いたかったのです。私は父親に、武藤はどんな事業をしているのか、と聞いてみました。父親は、そのころはもう生来の温厚さを子供に対しても示すようになっていましたが、その時ばかりは厳しい口調で、「事業やしとるか。ええように言うとなつたが、全部ウソじゃ。あいつはチンピラじゃ」と吐き捨てました。

武藤があこの事件を起こしたのは、それから半年後、私が高校に入学した春のことでした。隣の山間の田舎町で、強盗に押し入って老女に暴行、そして殺害したのです。武藤は逃亡したが、すぐに捕まった、と新聞には出ていました。その古い新聞の切り抜きを、私は今でも捨てられません。

…月…日夜十一時頃、…県…郡…町…、農業のかたわら洋服店を営んでいるAさん(六五)方で悲鳴が聞こえたので近所の人を駆けつけてみると、Aさんが下着姿で、刃物様のもので胸を刺されて仰向けに倒れていた。救急車で最寄りの…病院まで運ばれたが、運ぶ途中、出血多量で死亡。刺し傷が胸のほかにも三カ所あったが、致命傷は深さ七センチほどの胸の傷と思われる。

一方、事件発覚直後から警察と地元の消防団員が出て付近を捜索したところ、ほどなく近くの山中にうずくまっていた不審な男を発見、職務質問したところ、抵抗することもなくあっさりと犯行を自供、凶器の刺身包丁(刃渡り二四センチ)も男の自供通り、現場近くの草むらで発見された。

男は無職、武藤哲次(三三)。…市…町齋島出身、独身。窃盗・婦女暴行などの罪で前科三犯。去年の秋頃まで、…系暴力団…組(本部、…市…町)に所属していた。

事件は当日当夜、犯人の武藤が金品目当てにAさん宅に押し入り、Aさんと争った末暴行、非道にも殺害に及んだものとみられる。なお、武藤とAさんは以前から顔見知りだったという情報もあり、目下詳しく取り調べ中。Aさんは、七年

前に夫の……さんを病気で亡くして以来、一人暮らしだった。……

新聞には武藤と被害者の顔写真と、犯行現場の民家の写真も載り、「元暴力団員、非道の暴行殺人」「……で夜の惨劇」という見出しも大きく躍っています。

それを読んだとき、私は絶句して、新聞の伝える内容がすぐには理解できませんでした。私の知っている武藤と、新聞の伝える「犯人」とがすぐにはつながらなかったのです。さまざまな疑問も浮かんできました。なぜ武藤はそんな田舎の民家に押し入ったのか。物を取るだけならまだしも、なぜ老婆を暴行し殺さなければならなかったのか。近くの山に逃げ込んだというが、どうしてももっと遠くへ逃げようとはしなかったのか。

茫然とするなかから、怒りも湧き上がってきました。「くだらんことしやがって!」。それは武藤に対して初めておぼえた怒りの感情だったかもしれませんが、それともなおも武藤自身は憎めず、武藤の犯罪を憎もうとしたのだったのでしょうか。武藤に強く反発すると同時に、「犯人」「非道」と頭から決めつけ、武藤の人間性を全否定しようとするような新聞の書き方にも腹が立ったのです。

「武藤ももう終わりじゃな」と父は吐き捨てました。「アホウな奴じゃ。お咲さんがほんまにかわいそうじゃ」。

「おお、恐ろし、恐ろし。何ということをしでかしてくれたんじやろな。斎島の恥じやな」 母親は冷たく、そう言いました。

「死刑になるかな?」私は父に聞きました。

「さあのお。死刑か無期懲役か。まあ、今度は十年やそこらでは済まんだろう」

あいつはもう見放すしかない、という無念の響きが父親の言葉にはあるようでした。親しかった武藤が、突然遠くの世界に去ったような気がしました。けれども、寝る前にも学校の授業中にも、武藤が暗い目つきで民家に押し入り、老婆に襲いかかる場面が繰り返し浮かんできました。田舎の静かな日常しか知らなかった当時の私は、それを事実と認める時の自分の周囲の現実との落差におののきました。その時の武藤の心の動きについても想像しようとはしました。彼はどうして老婆を殺さなければならなかったのか、そのころの一途さでその謎を解こうとつとめました。ドストエーフスキイの「罪と罰」を読んだのは後年のことでしたが、金貸しの老婆を殺さなければならなかった主人公の内的必然を、私は武藤に置き換えて考えたものでした。武藤もまた自分が存在するためにこそ、老女を殺さなければならなかったのか。こんなふうに考えるようになったのは、しかし何年か後のことです。

新聞の続報には、武藤と被害者の老女は顔見知りで、老女は何度か武藤を家に泊めたこともあって親しくしていた。お金を融通していたこともあり、借金の返済を迫られた武藤がカツとなって殺害に及んだらしい、とありました。また、武藤の生い立ち

についても触れられていました。

犯人の武藤哲次は、京都市生まれ、満州で育ったが終戦後は母親の出身地である……市齋島町に帰り、母親の手で育てられた。齋島の人たちや当時武藤を教えた中学校教師の話では、武藤は学校時代から粗暴、反抗的でよく喧嘩をしていたという。中学卒業後……市の料理店に見習いに入ったが、続かずすぐに離職、以後転々と職を変えているうちに県内に勢力を張る暴力団……組に入り、強盗、婦女暴行などの事件を繰り返して起こして今までに三度服役した。……

こうした説明も思春期にあった私を反発させました。事件や事件の犯人を、世間の常識にあてはめて説明しているだけで、事件に及ぶ武藤の心理や必然については何も書かれていない、と不満でした。人を殺す。人間の本能に由来するのもかもしれない禁忌を侵してしまうわけだから、それは自分を殺すにも等しい行為だろう。その自分を殺してまで別の世界に入っていくたその瞬間の心をこそ知りたいと私は熱望したのです。それがわかってこそ、武藤が人間として理解できるでしょう。私の知っていない武藤と「犯人」が結びつくでしょう。あるいはそのころの、決して明るいとはいえない青春を送っていた私には、武藤の踏み越えてしまった境界が決して自分にも無縁ではないと思えていたのかもしれませんが。

事件の当座はそう自分なりに熱したものの、しかし事件から月日が経っていくうちにその印象は急速に薄れていきました。私はその後の武藤の消息を追う努力をしませんでした。それは容易に知れる事ではなかったし、また知ってもしかたがないことと思えていました。そして事件のみならず、私はしだいに武藤のことを忘れていきました。私はようやく、自分の中に吹き荒れる小さな嵐に対処することで精一杯という季節を生きはじめたのでした。やがて私は関西のK市の大学に進み、家を離れました。武藤が重い懲役刑を受けて服役していることを父親から聞いて知ったのは、休暇に帰省したときでした。しかし、その時父親も多くを語ろうとはせず、息子も詳しく尋ねようとはしませんでした。そのころの私にとって、武藤はもはや過去の人間でした。自分の、主観的にはそう幸福とは思えなかった子供時代にぶら下がっている、一つの記憶でした。

いつだったか、やはり休暇で帰っていた冬に、私は父親から毛布をお咲さんに届けるように言われました。お咲さんはそのころは島を出て、市内の海岸べりにある公共の老人ホームで暮らしていたのです。島の身寄りのない年寄りがたまに入る老人ホームでしたが、お咲さんは息子の事件以来、島にいられなくなり、私の父親が世話をしてそこに入園したのでした。

寒風の中、私は荷台に毛布の包みをくくりつけ、父親のバイクを飛ばしました。ホ

ームは集落のはずれの崖の下に、古い民家を二、三寄せたような感じで、海からの冷たい風に堪えていました。消毒と老人のにおいのまじった暗い面会室で見出したのは、見るからにやつれたお咲さんの姿でした。父親の名を何度も告げると、ようやく私を認めたようでしたが、それでも反応は鈍く、白髪の蓬髪の下の痩せてよけいに尖った顔は仮面のように動きませんでした。話はずまず、私は早々に帰りかけましたが、その時お咲さんが一言、「哲次は元気にしているようかえ？」と乾いた声で尋ねたのです。「便りもくれないもんでね。さっぱりわからないのよ」。まるでちよつと旅に出た子供を案ずるような口ぶりでした。私は何も答えられず、お咲さんの顔を見まもるばかりでした。

母とは愛すべき存在でしょうか？それとも、憎むべき存在でしょうか？

これが青春期を含めて、長い間の私の一つのテーマでした。

世に母恋いや母を讚美する言説や物語は多くあります。でも私はそうしたものを聞いても読んでも、正直言つてよくわからず、また興味ももてません。そこに披瀝されている無償の愛だとか盲目的な愛だとかの言葉が、観念としては理解できても、実感としてはわからず、むしろ意識はわがらうとするのを拒否するのです。その心理の仕組みは、まったく、ことさらフロイトなどを持ち出すまでもなく、幼年時代に現実の母に拒まれたことが原因であると思えます。それは子供の自然として、私もまた母に愛されようとしたのです。しかし拒まれたのです。それなりに長いと思えた子供時代の、日々の目立たないそういう経験の繰り返し、そうした心理の仕組みを作ったのです。母恋いを拒否したり、母恋いに鈍感になる機制を作ったのです。それ以上自分が傷つけないために。

そしてこの最初の人間関係に失敗した子供は、後に結ぶ多くの人間関係についても必要以上にぎこちなく、臆病になりました。今でもそうですが、私は人とのつきあいにおいて、自信を、基本的に欠いているようです。適度な距離を保って多くの人とつきあうのが苦手です。たまにうまくつきあえた場合でも、いつか裏切られるのではないかと不安がつきまとい、自分の方から逃避したりします。大勢の中では疲れ、孤独を好みます。そうした性向は、存在の不安にもつながりました。私は常に現在が苦痛でいたたまれず、早く未来へ行きたいと願います。その未来が来ても、やはりその現在に落ち着けません。生は楽しむべきものだと観念的には思いますが、生は不安で苦痛なものだという実感が拭いきれません。

しかしそんな「母に愛されなかった子供」でも、母恋いの感情がないわけではないのです。いやそれは地中のエネルギーのようにどす黒くなって無意識の領域に抑圧されており、時として妙なかたちで噴出し、私を混乱させます。そんなことを私は何度か、苦い思いとともに経験しました。

思春期を過ぎた後は、母と私はお互いに冷たい関係になりました。親子として最低限かわるだけで、それ以外は互いに不干渉を守ったのです。別にそうしようとするのでもなく、自然にそうなったのです。無理に近く結ばれていた二隻の船が綱を切られて思い思いの方向に流れていくような自然さで、そうなったのです。

高校を卒業すると、私は遠いK市の大学に入って下宿をしました。私には前途への不安よりも、ようやく家から解放される喜びの方が多くありました。母の方も、ようやく私と離れられるとひそかに安堵したにちがいありません。入学後は、春、夏の休暇や正月に帰省するくらいで、下宿にいる間は家を思い出すこともありませんでした。私は解放感、かといってやはり現在に満ち足りて暮らして行くことは難しかったのですが、ともかくも家の窮屈さから逃れた解放感には浸っていたのです。

ところが、思いがけないことがありました。下宿を始めたころ、食事の供されない休日にはよく近所の食堂に通ったものですが、そこで働いていたパートのおばさんに私は何となく心惹かれてしまったのです。もう四十半ばくらいにもなる、何ということはないふつうのおばさんでした。でも私はなぜだかしきりに気になったのです。おばさんの方でも私の視線が気になったのでしょうか、時々短い会話をかわすようになりました。

ある夏の夕暮れ、偶然街で出会うと、おばさんは笑顔で私を自宅へ誘ってくれました。コーヒーをすすめてくれながら、自分は以前に離婚をし、子供も独立して今は気ままな一人暮らしなのだ、あなたを息子のように思う、寂しいから時々遊びに来てくれていい、と言ってくれました。引き留め、夕食を食べさせてくれました。私はい気分でした。やはり私の思っていたようなやさしい人だと思いました。おばさんは風呂を沸かし、すすめてくれました。私はその好意にも甘えました。街なかの小さな古家の古風な木の湯船に浸っていると、子供のころの祖母の家の風呂を思い出しました。しかし、突然入り口のガラス戸が開いて、全裸のおばさんが入ってきたのです。私はあつげにとられていましたが、おばさんは笑って私に身体を押し付けてきたのです。とっさに私は身を引き、拒みました。急いで風呂場を飛び出し、服を着るのもどかしく逃げ出しました。

帰り道、私は何ともいえない嫌悪感にひたされ、また興奮もしながら、俺はそんなことをしたかったのではないのだと繰り返し思い続けていました。ではおまえはどうしてあんなふつうのおばさんに惹かれたのか、あのおばさんならやさしく自分を受け入れてくれると勝手に思い込んだ、あれはいったい何なのか。二、三日考え苦しんだあげく、私ははっと気づきました。なぜ、あんなおばさんに惹かれたか。それはそのおばさんが私の母に似ていたからです。そういえば、年格好も風采もおばさんは母によく似ていたのです。それを迂闊にも、私はその時まで気づかなかったのです。そう気づくと、急速に私はそのおばさんが嫌になりました。もうその食堂には寄り付かな

くなくなりました。

そのおばさんと母が似ていることは、嫌な感じとともに認めざるをえませんでした。でも、それならなぜ初めからそのことに気がつかなかったのかということが疑問として残りました。初めから気づいていれば、そのおばさんに近づくことはなかったでしょう。そこにはやや複雑な心の仕組みがあるようでした。

後年のことですが、私はその時の心理を次のように自分に説明してみました。そこには無意識の深みでの機制があった。私の意識は母を嫌っていましたが、反対に無意識の自然は母を慕っていたのです。そこで無意識は異郷で初めて経験する寂しい暮らしの中で、母に似た人を探し、そして探し出しました。ただ、それを意識に上せると意識は拒否するので、その部分を巧妙に抑圧して意識に気づかせないようにしたのである。あるいは逆に、意識の方が自分の統一を守るために母恋いの感情を無意識に抑圧したとみるべきなのかもしれません。それとも、意識と無意識が巧妙に結託して人にある行為に促すなどというようなことがあるのでしょうか。いずれにしても、そこで明らかになったのは、そして新たな私の苦痛の種ともなったのは、無意識がたしかに母恋いの感情を根深く宿しているということでした。

そしてこんな経験が一再ではなかったのです。やはり学生時代、旅先で二、三泊した宿のおかみさんを慕ってしまいうようなこともありました。生き難い感じに圧されて一人でおもむいた奈良の吉野の山中の旅館で、鋭敏になった私の感受性はそのやはりふふうのおばさんに母を映してしまったのです。つい最近も、似たようなことがありました。私は初冬に学会で遠い北方の街へ出張したのですが、そのついでに近くの有名な縄文遺跡に出かけ、一人で見歩いているときにあるおばあさんと知り合いました。その人はごく近くの町から来ていたのですが、おばあさんの屈託のない話には惹かれ、私たちはもう雪の舞いはじめた街へ出て夕食をともしました。初対面とは思えない気安さで、私はその人が方言をまじえて語る雪国の生活などの話を心楽しく聞きました。旅行から帰った後、その人から名産の果物が届き、遺跡で一緒に撮った写真も同封されていました。ところがそれを見た妻と中学生の娘が口を揃え、その人が私の母とそっくりだと断言したのです。私は驚き、そんなことはない、と抗い、あらためて写真を眺めたのですが、苦い気持ちで、妻や娘の主張を認めざるをえませんでした。

意識では母を嫌っているのです。しかし無意識はいつも母を求めているのです。たとえば潮の流れの方向と反対の方向に風が吹くと三角波が立ちます。潮と風の双方の力に引つ張られて船は危うくなります。潮の流れが無意識だとすると、海上を吹く風が意識です。私の船体はぎしぎしときしみ、しばしば沈没の危険に瀕します。しだいに私は、こうした私自身の心の仕組みを理解し、生き難さの因として認め、そしてこの生を死まで生きおせようとするなら、何とかこの船を壊さないように堪えていく

しかないのだと思うようになりました。また、その仕組みの存在の意識化が気づかせてくれる他のこともありました。たとえば私と私の祖母との関係です。私は幼いころから母方の祖母を強く慕ったのですが、それは祖母を母恋いの代償としたということでした。弟との関係も、私は無意識の母恋いゆえに弟に強く嫉妬をしていたのです。

そうして、折に触れて自分のことをあれこれと想ってゆくうちに、思いは武藤の上にも及んだのです。武藤の心もまた、三角波の立つ禍々しい海をきしみながら行く船でなかったのか。意識では母を嫌い、無意識では母を慕うという矛盾に苛まれたのではないか。その武藤の海は私の場合などよりもっと激しい、嵐のような海だったのだろう。その葛藤が武藤を犯罪へと追いやったのではないか。さらにこうも考えられました。武藤が殺した老女は、あるいは母親、お咲さんに似ていたのかもしれない。しかし武藤自身はそのことに気づいてはいなかった。だから私の経験のように、自分をやさしく受け入れてもらえるような気がして、その老女に親しんだのだ。ところが、ある時、たとえば貸した金を返せ、あるいはもつとまともに生きよ、と言われた時、あるいはその老女を抱いた後、武藤は激しく気づいてしまったのだ、その老女が母親にそっくりだということ。そこで殺した。

ただ、そうだとしても、なぜ殺しまでしなればならなかったのか、という疑問はやはり解きたい謎でした。その老女がお咲さんの身代わりだったとしたら、武藤は自分の母親を殺したことになるわけです。母親が子をこの世に産み落とすのです。ですから生みの親を殺すということは、自分自身の存在をも滅ぼすことではないでしょうか。すると武藤は母を殺して母の存在を否定し、同時に自己の存在をも否定したのでしょうか。その瞬間、ある弾みで母への深い憎悪と自己破壊の衝動が同時に噴出したのでしょうか。母殺しによって未生以前へと立ち返ろうとしたのでしょうか。そうだとすると、武藤にはそうするしかなかったのでしょうか。

二十代半ばに私は恋愛をし、やがて結婚しました。相手は、母性豊かな女でした。この結婚すら、私は母との関係が作用していないとは考えられません。

何度か失恋した末に妻と出会って、私は救われたような感じを深く抱きました。それまで、この生は孤独で生き難いとばかり思っていました。これで生き直せるのではないかと希望を持ちました。妻は田舎出の、何より母性豊かな女でした。私の無意識は母性に飢えていたのでしょうか。そして妻の心や身体に失われた母性を求め、ある程度は癒されたのでしょうか。幸いなことに、妻の姿かたちは母とは少しも似ていませんでした。

やがて子供が二人生まれました。私の想像どおり、妻は子供たちにいっぱい愛情を注ぎました。むしろかわいがり過ぎたために、子供の精神的自立が遅れるのではないかと彼女自身は心配しています。ですが私は、妻のそんなありふれた懸念をどこか

安心して聞いていられるのです。とくに子供の幼時には母親は愛情をできるだけ多く注いでやるべきだ、それこそが子供たちが成長したときに世の中を生き抜いていく力になる、と単純に信じているのです。

しかし、私の中の抑圧された母恋いの問題が結婚によってすべて解決されたかというところ、そう単純ではなかったのです。妻はいくら母性豊かとはいってもやはり私にとっては妻であり、育ての親ではなかったのです。私の中のかつえた部分によって少しく癒されることはあったにしても、それで実の母親との原体験が消えることはなく、まして妻を母の位置に据えてもう一度それを生き直すことなどは無理だったのです。そうしたことは意外に早く、恋愛と結婚初期の、相手にばかり熱中するあの昂揚した時期が過ぎるともう明らかにになりました。煙が晴れてみると爆撃でも吹っ飛ばなかった要塞のように、あるいは熱線を照射されても死ななかったガン細胞のように、孤独の感じ、生き難いという感じはまたぞろ私に強まってきたのです。

かといって、それを解消するために現実の母親に向かっていったのではないことは、先にも言いました。現実の母親との関係は冷たいままです。冷たいままで枯れていくようにしています。私が自分自身を救うために向かっていった対象は、母方の祖母、でした。祖母を通じて故郷の、島、でした。島を通じて、あの少年の日に武藤とも訪れた、お山の観音、でした。

私は大学は文学部で、英文学を専攻しました。文学などを選んだのも私の場合、心の屈託のなせるわざにちがいはなかったでしょうが、高校時代にスウィフトの「ガリヴァー旅行記」を愛読したことが一つのきっかけになりました。それも子供たちの誰もがおもしろがる、小人国、大人国などの冒険ファンタジーの部分に興味を惹かれたのではなく、馬人国の部分に特に露骨に表れています。作者が徹底的に人間存在というものを風刺し、批判し、軽蔑しているところに共感したからでした。本の解説に、スウィフトは幼年時に母に去られ、母親の愛情を知らないまま孤独に育ったとあった点にも親近感をおぼえました。そして私の関心は、大國イギリスの文学よりはその隣の、スウィフトもその一人であったところの、土着性や島国性を豊かにもつアイルランドの文学により多く向かっていきました。

卒業後は大学院に進み、奨学金を受けながら修士課程を終えると関西のN市の小さな大学に英語教師の口を見つけ、就職しました。そこでもう二十年近くも英語や英文学を教えています。そこでの勤務ぶりについては、ここで言ってもしょうがありません。年数だけは長い英語英文学の研究や教育、またイギリス・アイルランドへの留学も、私の人格形成や生活気分にはあまり影響を及ぼしていません。私の場合、そうした道を選んだのも対象への情熱からではなく、生々しい現実からの逃避という意味合いが大きかったでしょう。まだ封建時代の暮らしを残しているような静かな辺境の島で育った私には、人や人工物や組織や関係であふれかえってむやみに騒々しい

都市の社会も、そして都市社会が代表している現代日本も、なじみにくいものでした。やむなく都市には暮らしながら、その生々しい現実とは画された場所で、遠いイギリスやアイルランドの昔を空想し、無邪気な学生たち相手に講じている、そうした生活のスタイルならどうか堪えていけると思えたのです。

都市を異邦のように感じながら暮らす年月が長引くにつれ、自己の存在の根拠を求めるといかに、私の中に「島」というテーマがしだいに固まり、大きくなっていきました。実際の齋島での子供時代は必ずしも楽しいものではなかったのに、都市への反発や生きにくさが、その対極にあるような小島を理想化するベクトルを強めるようにした。それには、留学中にアイルランドのいくつかの小島を経巡った体験も一つの契機となったようです。

一年間のイギリス・アイルランド滞在中、私は文学や宗教にゆかりの土地によく旅しましたが、私に深い印象を残したのは、ロンドンでもマンチェスターでもダブリンでもなく、アイルランドの諸方に点在する小さな島々でした。たとえば西部のゴールウェイ湾に浮かぶアラン島。曇天の下でまばらな人家と痩せた畑地の上を寒風が渡っていました。深い皺を刻んだ漁師や農婦の厳しい顔。私は寒々しい宿で吹きすさぶ風の音を聞きながら、冬の齋島を思い出していました。

また青年イエイツがあこがれて歌った、スライゴー地方の湖に静かに浮かぶイニスフリー島。実際にはお椀型のとても小さな無人島で驚きましたが、ボートで渡してもらい上陸すると、たちまち齋島でのように、島の土や木々や水があちこちから語りかけてくるようでした。イエイツはロンドンの雑踏の中で、ふと天啓のように、少年時代によく訪れたこの島を思い出して詩作したといえます。都会生活を厭い、自然の中の生活をあこがれた若き詩人が、孤独と静けさと充足を託した極小のユートピアなものでした。

また、北部のやはり湖上に浮かぶステーション島は、古いケルトの文化を残す信仰の島でした。五世紀にアイルランドに初めてキリスト教を伝えたという聖パトリックの苦行の地で、空也上人が来島して苦行したという齋島と似ています。そこでは夏期、信者たちがたくさん集まってきて三日間断食し、徹夜して祈るといふ伝統行事が今なおおそかに続いています。イエス・キリストが磔刑に処されたあの道行きを模して作られた道程を歩き、祈り、贖罪を願うのです。島は罪を犯してしまった人々の煉獄でもあり、さまざまの亡霊も生息するようです。現代のシェイマス・ヒーニーというノーベル賞詩人は、ここで過去の狂人の王や司祭や作家の亡霊に次々に出会ったようすを「神曲」ふうに詠っています。また、裸足の信者たちの群れが流れていくのです。

僕は他の音がしたので振り返った

するとシヨールを掛けた一群の女たちが

青いオート麦のなかを通っていった

微かにスカートが擦れていく

その動きが朝を悲しみに沈め

辺りのしじまに囁きかけた

「我らのために祈り給え、我らのために祈り給え」と

辺りはその呪文にかかっていた

やがて畑には

うろ覚えの顔が溢れていた

祈りを終えた女たちが

バラバラと通り過ぎて行った

就職してからも、結婚してからも、長い休暇には私はよく故郷の島に帰りました。妻子を伴ったことも何度かあります。四国本土の小さな港から日に二便の定期船が出港すると、やがていくつかの無人島の間から斎島が見えてきます。周囲十キロばかりの、低い台形状をなす島は、大洋の流れの中にひとり浮かぶ、神々しい姿です。島に近づくとき、島は本島と属島が懷を開くようにして内海に船を迎え入れてくれます。集落は本島の南端のわずかな平地に固まっています。古い大きな家で長く一人暮らしをしていた祖母は、私や私の家族が行くと歓迎してくれました。居間の卓袱台や炬燵の前に、私は祖母によく島のことを尋ねました。ある時期は、フィールドワーカーよりしく、祖母の話テープに録音し、ノートにも採りました。私は、早く離れてしまった故郷の島のことをよく知りたかったのです。私の祖母は記憶力に秀でたすぐれたインフォーマントで、島に民俗の研究者が調査に来ると必ず祖母のもとを訪ねてくるほどでした。数年の間、私はまとまった休暇があると、自分の専門の研究はそっちのけで島に通いました。祖母に尋ね、また祖母に従っていくつかの信仰行事も見学しました。祖母を通じると、つましくゆかしい島の生活ばかりではなく、島そのものが生命いのちあるもののように現れてきたのでした。

島の生命といったものを、私はアイルランドの小島でも感じたのですが、日本では明恵上人の話があります。明恵上人は若いころ、故郷の紀州田辺の近くのある小島で修行をしました。そして終生その島を愛し続けました。齡をとって京都梅尾に行い、澄ましてからもその島が忘れがたく、ある時は思い余って島に宛てて書状をしたため、「島殿へ」と上書きして使いさせようと思いました。ところがその小島は無人島であるし、使いの者は困って、どうすればよいのですか、と上人に尋ねました。明恵は何くわぬ顔で、「いや、なに、島に着いたら大声で、梅尾の明恵からの手紙ですと呼ばわって、どこにでも置いてくればよいのだ」と答えました。件の手紙には、「あなたこそは

私の最高の友です、私はいつもあなたのことをなつかしく思っています、あなたこそはすべてを具足する完全な存在です、仏そのものです……」と島を讃えてあった、というのです。

おそらく明恵上人は、若いころその小島で厳しい修行をするなかで、島と一体になる三昧境を味わったのでしよう。修行に縁のない私に、上人の島への思いがわかるはずありませんが、ただ、祖母を通じて島の昔や今のあれこれのを知るにつれ、私にとっても故郷の島はしだいに、たんなる物理的自然ではなく、霊的な存在だと思われてきたのです。島に帰ると、島は大きく私を包み、慰めてくれるように感じられました。子供のころよく遊んだ、今は無住となった祖母の家の庭先の踏み石に一人で腰掛けてやわらかな日差しを浴びたりしていると、不意に全身が島によって包みこまれ、慰められているという感覚に襲われて、何が悲しいというわけでもなく土の上にしきりに涙をこぼしてしまおうというようなこともありました。

そして島を象徴するのが観音菩薩でした。私の祖母はまた熱心な信者で、朝夕に観音を念じることほもちろん、長い間、身体が動かなくなるまで観音堂の世話役も務めたのでした。祖母からは観音についてもいろいろ聞きました。「おまえが信じるかどうかはわからんけんどな」と前置きして、自分の経験した観音の、いわば靈驗譚を話してくれました。あることにさまさま迷っている時に、夢に観音が現れてお告げしてくれることはしょっちゅうだそうです。お観音さんには使いの蛇がいるそうですが、祖母が観音に参る時にはよくその大きな白蛇が導いてくれるそうです。

「それはな、こう、道の端を嬉しそうにな、撥ねるように這うていくんじや。見えたり見えなんだりじや。おうおう、ありがとよ、と礼を言いながらいっしょに行くんじや」

見つかった鎌の話もありました。

「ウチがな、お観音さんの裏手でな、掃除しよと思て草刈りよった時、鎌を落としてしもたんじや。ほうじやな、二年も前のことじやろか。あの崖のずうつと下に木があるだろう？あそこに落ちて見えんようになった。あーあと思て、あきらめて帰った。それで次の日じや。またほこへ掃除に行てみたら、何とその昨日落とした鎌がな、目の高さの木の枝に引つ掛かるとるんじや。これ、見つけよ、いうふうにな。誰もあんな危ない下まで拾いに行く人はないだろう？」

空也上人の話も、あらためて祖母から聞きました。昔、空也上人は、京都で厳しい修行をなさっていたが、ある時この齋島のことを耳になさって、梅檀木に乗ってわざわざ島にやってきなされた。その流れ着かれた所が、あの、「僧渡が浜」よ。空也さんはお山に登って厳しい修行をなさった。七日七夜の間、眠らず食らわず、ただただお経を唱えなされたというわ。お山のお堂の裏手にはな、崖の上に行場跡が、ええ、今でも残つとるよ。ほして乗ってきた梅檀木でお観音さんを刻まれた。それがお山のお

観音さんよ……。

祖母と一緒に観音さんに参ったことは子供のころから何度もありますが、祖母が身体を悪くする前、その最後に参ったときのことは一生忘れられません。私はやはりフィールドワーカーよろしく、参詣の道中の石仏や話をする祖母をビデオに収めたり、メモをとったりしながら歩いたのでした。山道を一時間余りもかけて歩き、たどり着いたお山の頂きのお堂は、いつものように清らかな松籟に包まれていました。祖母はお堂の板戸とガラス戸を開け、中に入ってお灯明を灯し、お供えをし、畳に座って神妙な表情で読経を始めました。かたわらで合掌しながら、私は何ともいぬ恍惚感を味わったものでした。その小さな観音堂が、いわば胎内であり、私はそれにやわらかく包まれている嬰兒のように思えたのです。また、この島を離れてあくせく生きていく自分、その生活の中で犯しているだろうさまざまな罪がすべて許されるような気がしたのです。静かに涙が流れました。お厨子の前には、あらゆる人間のすべての所業が映されるという鏡が、昔のままに置かれていました。

やはり祖母に連れられて住職を尋ね、寺に伝えられている巻物を見せてもらったのもそのころでした。住職の老僧は私の小学校時代の恩師でもあった人で、再会を喜び、親切にお寺の本堂で寺宝の巻物を広げてくれました。私はそれをもビデオに収めました。巻物の奥書によると、それは明治二十一年にそのころの住職とおぼしき人が、当時口伝されていた寺の縁起を記したものでした。空也上人が来島して修行をし、寺の本尊の観音像を刻んだくだけは、次のようになっていきます。

ある夜の夢に、金人來りて上人に告て宣く、阿波の国那賀郡の蒼海中に一つの島あり。名を湯島と云ふ。汝、早く彼処に至らば、正に是れ莫大の利益を蒙るべし、との告により、上人此の島に來りたまひ、夫より七日の間動ぜず不眠の行法を修せられける。七日満ずるの暁、五色の雲東方よりたなびき、金色の光を放ちて恰も日月の如く、異香芬々たり。不思議なる哉、空中に十一面觀世音菩薩、無量の諸菩薩に左右を圍繞せられて忽然と出現したまふて、上人に告て宣く、善き哉善き哉、汝末世の衆生を濟度せんと思ふ、方に今なり。我が真像を永く此の靈地に留めよ、と告げたまふ。此の時、上人座より起ちて合掌したまひ、夫より赤梅檀の香木を持って、一刀三札の尊容を彫刻したまふなり。……

「湯島」は齋島の古名です。空也は夢の告げによつて齋島を訪れ、七日の不動不眠の行法を修すると、空中に十一面觀音が現れ、衆生濟度を勧め、また觀音像を刻むよう教えた、その空也が彫った赤梅檀の觀音像がご本尊だということです。この巻物は、年に一度の觀音の祭礼日に、住職が信者に読んで聞かせる習わしです。そこで祖母を含め島の人たちが伝えている空也伝承が、ほぼこの巻物をもとにしているらしいとも

察しがつきました。

こうして私は祖母の導きで島の観音や空也上人に興味を持つようになりました。都市に帰ってからも、大学図書館や公立図書館でぼつぼつと島の歴史や地誌を調べました。そうした作業をしながら、武藤のことも思い出すことができました。もう遠い過去になりましたが、まだ島の小学生だった私に、お山への道を歩きながら武藤は観音さんの夢のお告げや、空也上人のことを語り、そして調べて本に書くんだとたしかに言ったのです。その数年後に会った時、武藤は本のことはずっかり忘れていたのですが、しかし武藤が島の観音や空也について興味を持っていたことはまちがいありません。私は調べながら、武藤に代わってやっているような錯覚に襲われ、苦笑しました。そのころはもう私も三十代に達し、当然のことに少年時代のような武藤へのあこがれはすっかり消えていたのです。ただ、武藤はどうしているのか、まだこの世に永らえているのか、それとももう、と頭に浮かぶことが時おりあるくらいでした。

集中的に調べたわけでもなく、また専門外のこと、数年の間はその私の「研究」は滞ったままでした。その間に祖母が島で天寿をまっとうしました。葬儀は島の方式で、昔ながらの土葬で行われ、私もかけつけて寂しく参列したのでした。祖母が亡くなってみると、私は島に帰る理由の大半をなくしてしまいました。私にとって、祖母は母代わりであり、また島そのものだったのです。

空也についての知識が少し進んだのは、国文学専攻の同僚に教えられた空也の伝記を読んでからでした。「空也誄」という古い文章の存在もその時初めて知ったのです。漢文で書かれた「空也誄」を苦勞して読み進めながら、私は驚きと感動に打たれました。それまで私は、いかに祖母に聞かされても、寺宝の巻物を読んでも、空也の来島伝承は伝説にすぎないのだろうと思っていました。地誌の類にも、おおよそは齋島にはそういう伝説があるくらいのこと、済まされていたのです。空也は一千年も昔の人です。また、京都の六波羅蜜寺にある有名な像のように、鉦鼓を胸に掛け、鹿杖について南無阿弥陀仏を唱えながら東北地方などまで布教に歩いた人です。そこで島の伝承も、弘法大師や行基の伝説のように全国に数ある空也伝承の一つにすぎまいと思いついていたのです。ところが、「空也誄」を読むと、そうとは思えなくなってきました。「空也誄」には、齋島のこと、がたしかに書かれていたからです。次のようです。

阿波土佐両州の海中に湯島有り。地勢靈奇にして、天然幽邃なり。人伝ふるに、観世音菩薩像有りて、靈驗掲焉なりと。上人観音に値はむが為、故に彼の島に詣づ。六時に恭敬し、数月練行するも、終に見る所無し。爰に粒を絶ちて像に向かひ、腕上に香を焼き、一七日夜、動かず眠らず。最後の夜、向かふ所の尊像、微妙の光を放てり。目を瞑れば則ち見え、瞑ぢざれば見ゆること無し。是に於て香を焼ける腕、焦痕猶遺れり。

湯島——齋島は観音菩薩の示現する靈驗あらたかな土地で、まだ若い空也が会うためにやってきた。空也は数カ月も勤めたが、しかし観音は姿を現してくれなかった。しかし断食し、自らの腕上に香を焚いて供養し、七日間不動不眠の苦行をすると、光輝く真身をついに見ることができた、というのです。内容は島の伝承と大同小異なのですが、しかし「空也誄」という文章の成り立ちや古さが注目されました。「空也誄」は空也の没後ほどなく、源みなもとのためのり為憲という当時の文人によって、空也の死を悼んで書かれたとされています。為憲はこの誄を書くために、空也の遺弟子を尋ね、また空也自筆の資料を集めたと書いています。だとすると、そうして書かれた「空也誄」の内容は事実に近いはずだ、空也が齋島を訪れたということも、たんなる伝説ではなく事実と見なすべきだ、そう私には考えられたのです。

私はこの発見に小躍りしました。一千年も前に書かれた文章に、故郷の島の名が載り、しかも「地勢靈奇にして、天然幽邃なり」と讃えられていたのです。そして修行時代の若き空也が渡ってきて、あの山道を歩き、松籟と潮騒に包まれたお山の頂きで修行をし、そのはてに光輝く観音の姿をたしかに見たのです。古い史書の一つには、空也が訪ねたのは齋島だろうと記述してあって、私の確信は深まりました。でも「空也誄」の研究者たちは、島の名が多少異なるせいか、不思議にもほとんど現実の齋島の存在を知らないようでした。

そして、ああもしかすると、このことを最初に発見したのは武藤だったのかもしれない、とも思い出しました。昔、観音山へとたどる道で、武藤は島の観音について調べ、いろいろわかったとたしかに私に言ったのです。そしてクーヤショーニンやお山のお観音さんのことを本に書いて、「ほんまのこと」を島の連中に教えた、とも言っていたのです。「ほんまのこと」とは、あるいは「空也誄」の記述のことではなかったのか。でもすぐ、それはありにくい推測だとも省みられました。

空也の来島について、さらに私にはこんなふうにも考えられました。観音の住する島なら、それは一つの補陀落ふたらくとも見なされていたわけだろう。そういえばお寺の山号は補陀落山という。補陀落は經典類に説かれている観音菩薩の浄土だ。そこでは山頂の宮殿で、観音菩薩が衆生に大慈悲を勧める説法しているという。一千年の昔から、島は観音の浄土であったのだ……。そしてまた同僚に教えを乞いつつ調べてゆくうちに、その証拠というべきものを、中世の歌謡集、「梁塵秘抄」の一首に見出しました。それは、こういうものです。

淡路はあな尊たふじ 北には播磨の書写をまもらへて

西には文殊師利 南は南海補陀落の山むかに對ひたり

東は難波の天王寺に 舍利まだおはします

淡路島は四方に靈地を配して尊い所だと讃えている歌です。その四方の靈地のうち、北も西も東も所在は明らかです。「南は南海補陀落の山」だけが所在不詳で「梁塵秘抄」の専門家の間にも諸説があるようでしたが、淡路島の南の海の補陀落といえは齋島よりほかない、疑う余地はない、と私には思えました。

そう気づいた私は、島の山や断崖や磯などの自然の相貌の一々を、あらためて靈的存在として思い浮かべました。すると島の自然は決して貧しげなものではなく、豊かそのものでした。島に帰ったときのあのやわらかく包まれ、慰められる感じ、そしていつか観音堂が胎内だと感じられたことも至極自然に納得できるような気がしました。昔から見てきた、祖母や島の人々の信仰の深さにも思い至りました。昔、島の人々が意志して観音を祀ったのではないのでしょうか。大昔からの観音の靈地に、いつのころからか、そこに慕い寄るようにわが先祖たちが住みついたので。

お咲さんが老人ホームで亡くなりました。正月に家族で久しぶりに実家に帰ったとき、父の口からそんな話が出ました。晩年は痴呆の症状が出て、死にざまも哀れだったそうです。遺体の引き取り手もなかったので、父が葬儀から遺骨の世話までしたのだそうです。「かわいそうなばあさんだったのう。気の強いしゃんとした人で、はなやかな時もあったんじゃないが、戦後島に戻ってからは苦労し通しだったのう。子供に泣かされたわのう」と父は同情するふうでした。

その折に、武藤の消息も知れたのです。武藤は中国地方のある都市の刑務所に今も服役しているというのです。お咲さんの死が武藤に知らされ、その武藤から父のところへ礼状が届いたそうです。私もそれを見ましたが、簡単な文面で、母親の生前、また葬儀で父の世話になったことを謝してありました。自分のことにもただ一文、「私も真面目に更生の道を歩んでいますから、どうぞ御放念下さい」とふれていました。文字は小さいが乱れもなく、丁寧に書いてありました。封筒の裏書きには気を使つてか署名だけがあったのですが、消印で刑務所の所在は見当がついたので。

武藤のあの忌まわしい事件から、もう二十年余りが経っていました。武藤はもう五十歳をいくつか越えているはずでした。五十歳代の武藤の風貌はまったく想像できませんでした。ましてその間の武藤の生活や精神的な変化も、私の思慮は及びかねました。

それでも、私は武藤に宛てて手紙を書いたのです。その心理は我ながらはつきりしません。ただ、思いがけず武藤の消息を知つてなつかしさをおぼえたのはたしかです。それは私自身の過去へのなつかしさでもあったでしょう。私もすでに人生半ばに至っていたのでした。また武藤とのことは、まぎれもなく島や観音につながる記憶でした。

その私の最初の手紙は簡単なものでした。安否を尋ね、なつかしくて手紙を書くこ

と、お咲さんは残念だったこと、自分は元気にしていること、島のように昔とはずいぶん変わったことなどでした。そして島の観音さんや空也上人について少し調べているとも書き添えました。刑務所の住所を調べ投函しましたが、きちんと武藤の所へ届くかどうかはわかりませんでした。

武藤から返事が届いたのは、二カ月も後でした。父の所で見た手紙のように、小さく丁寧な文字で、一枚の再生紙にボールペンで書いてありました。

拝復 梅の花便りも聞かれる頃になりましたが、あなた様にはご清祥のことと存じます。

先日は御便り賜り、なつかしく、また有難く、自分のような者にも、と涙が出ました。あなた様が御立派に成長され、御令室やお子様にも恵まれ、また御立派にお仕事されていること、陰ながら大変嬉しく存じております。自分も真面目に更生の道を歩んでおりますから、自分のことはどうぞ御放念下さい。

ただ、もし迷惑でありませんでしたら、齋島のように、もっと知らせて下さい。

今となっては島がただただなつかしく思えます。お山のお観音さんは、毎日毎日、心に念じております。

では御機嫌よろしゅう。皆々様の御健勝を衷心より祈念しております。 敬具

私は武藤からの返信を喜ぶと同時に、こうした手紙をどう読み取ってよいのか迷いました。この丁重で遠慮深い文面には、どの程度に武藤の本心が表れているのか。刑務所からの手紙では検閲もあるのだろうし、そうだとしたらあたりさわりのないことしか書けないわけでしょう。外部への手紙の書き方のマニュアルなどもあるいはあるのかもしれない。文面からその遠慮や礼儀の皮を剥いで武藤の本心を見いだすのはむずかしい作業に思われました。しかし、文中のお山のお観音さんのくだりについて武藤の本心が表れていることだけは疑えませんでした。武藤もまた、長い間島のお観音さんを慕ってきたというのです。

一週間ほど置いて、私はまた武藤に手紙を出しました。それには島のように、そして空也や観音について私の調べたことを簡潔に記し、迷ったのですが、お寺の縁起と「空也誄」の一部の書き下し文、訳文のコピーも添えました。奥の院の写真も一葉添えました。

しばらくして、武藤からはまた丁寧な札状が届きました。島のようにすはよくわかった。お山のお観音さんの写真は大変嬉しかった。これからお守りにさせてもらう。お観音さんや空也さんのことは自分には難しいが、繰り返し読んでみる、と書いてありました。

それから数度、武藤とは手紙をやりとりしたのです。武藤からの手紙はいずれも

簡潔なものでしたが、度重なると文面の背後に武藤の表情が多少は見えてくるようでした。それはもう、かつて島で親しんだエネルギーシユな青年の姿ではありえず、慎み深く前途に希望を抱かない初老の囚人の姿でした。武藤は自分の日常にふれてこうも書いていました。

この生活は、十年一日、毎週毎日同じことの繰り返しです。自分はまだ数えられないくらいの朝夕をここで送りました。それで、昔のシャバのことは、全部夢のような気がします。自分はある日、死にました。決して自分の犯した罪を忘れていたわけではありませんが、そんな気がします。ここでの生活が、自分の世の中の全部です。シャバは、自分にとってはないも同然です。

またこんな一節もあって、私に印象深いものでした。

自分のいる部屋の窓からは、庭の桜が数本が見えます。春のたびに花が咲き、満開になり、散っていきます。やがて青葉になり、秋に色づいて散っていきます。樅の木もあります。島を思い出します。道のそばにはタンポポなど野草も咲きます。みな大変きれいです。そんな時々の木や花のようすが今の自分には嬉しく、ありがたいと思えます。後悔先に立たずといいますが、そんなことにもっとも早く気づいていたら、自分の人生も違ったものになったのではないかと思いません。

そして、自分は毎日お観音さんを念じ、般若心経を唱えていると書いてありました。しだいに私は、武藤に会う必要を感じるようになりました。何か実際的な用事ができたというわけではありません。用事というなら、いわば人生の用事のようなものです。

その前年の夏、私は突然髄膜炎に罹り、緊急入院しました。医者には当初、最悪の場合もありうると告げられました。激痛と高熱にうなされる中で私は死を覚悟し、子供たちのことを妻に頼みました。初めの見立てが誤診だったのか、十日ほどの入院で完治しましたが、もと通りになっても、死が身近にあるという感じは残りました。人は、いつかは自分もくたばるのだと意識したとき、くたばる前にぜひ会っておきたいと思う旧知の人がいくらかはいるものではないでしょうか。その人と顔を見合わせることによって、相手の来し方を知り、またそこに自分の人生を並べてみ、何か……過ぎた時間をたしかめ、互いの生を味わうのです。分かれた川の水の流れが、再び下流でわずかに交差するようになります。私にとって、武藤はそういう人間の一人でした。

何度目かの手紙に、私は会いに行きたいと書きました。しばらく待ちましたが返事

はありませんでした。私はもう一度手紙を書き、そして数日後、差し入れ用の下着の包みなどを妻に用意させると、かまわず会いに出かけました。

そこは中国地方のある中市の郊外にありました。鉄橋や道路橋のいくつも掛かった川を溯った山際の一隅に、高いコンクリート塀が、晩秋の細い雨の中にけぶっていました。入口の受付で渡された書類に、私は武藤との関係をちよつと考えて「親族」と書き入れました。番号を印刷した紙片を渡され、待合室の場所までの道を教えられました。

高い塀のそばの広くもない待合室には、二三組の人々が座ったり、窓口で何か書類に書いたりしていました。右手の小窓が差し入れ口だとわかり、尋ねてみたのですが、下着などは差し入れ不可とのことでした。現金は渡せるそうで、後で武藤の許しを得られれば多少を差し入れようと思いましたが。その並びの奥にいくつかの面会室が並んでいるようで、声は聞こえないもののドアの向こうに人の気配がしました。私は長椅子の一つに掛けて待つことにしました。飲料の自動販売機が一つあるきりで、裝飾にまったく意を用いていないその部屋の雰囲気はどこかに似ていました。どこかの火葬場の待合室だったかもしれません。あるいは郊外の精神病院の待合室だったかもしれません。窓に縁取られた空は灰色で、雨の中にひよ鳥が来て鳴いていました。でも建物全体は中に数百人が閉じ込められて暮し、作業をしているとも思えない静けさでした。

私のすぐ前で、派手な化粧の中年女が煙草をふかしながら小声で若い男女と話していました。母と娘夫婦で、あるいはその女の夫に会いに来たのかもしれません。その前には地味なりの三十女が一人うなだれて座り、時々ハンカチを目もとにやっっているようでした。何となく、私はその女の身の上が気になり、やはりその夫が服役しているのかもしれないと想像しました。その夫は何の罪を犯してしまったのか、男のある一時の狂気のふるまいでその夫婦は奈落に落ちてしまったのかもしれませんが。まるで映画のワンシーンに立ち会っているような気がしてきましたが、映画ではなくこの世にはそういう現実がたしかにあるのです。そして武藤が厳しい現実を長く生きてきたように、その女や女の面会相手も別の厳しい現実を生きているのです。そうしたそれぞれのさまざまな人生の糸が、絡み合い離れながら無数につづられているのが世の中という織物なのです。

壁の注意書きなどに目をやっていると、事務所のドアから現れた制服制帽の刑務官が私の番号を呼び、手招きしました。立っていくとその人は小声で、申告の書類に「親族」とあるがどうい関係かと尋ねました。私は適当に答えました。関係を昔にたどると皆が何らかに血縁的につながっているような小島なので、「親族」はまったくの嘘ではあるまいという気がありました。それに刑務所では親族以外の面会は難しいとも聞いてきたのです。ここで断られてはいけないと、身分証を示し、遠方から来たこと、

武藤に子供のころに世話になった者であることなども述べ立ててみました。係官は首をひねりましたが、かろうじてうなずいてくれました。

先の人々は番号が呼ばれ、立っていきました。面会を終え、うなだれて戻ってくる人たちもいます。多少緊張しながら座っている間に、しだいに逡巡が私に兆してきました。自分は武藤に会って何を言えばいいのか、語るべきどんな言葉があるというのか。会う必要があると思ひ込んで、後はあまり考えずに一散にやって来たていでしたが、あらためて思うと自分の行為の意味が自分でわからなくなってきました。武藤には迷惑ではなかったかとも省みしました。でも子供のころの武藤との交わりを反芻していると、やはり来てよかったのだ、来るべきだったのだという気持ちが強まるのでした。

やがてさっきの刑務官が現れ、私の番号を告げました。

ドアを開け、狭い面会室に入って腰を下ろすと、すぐに透明な仕切りの向こうのドアが開いて看守に連れられた囚人服の男が現れました。窮屈そうに座ると、私のほうを見るでもなくうなだれました。

「良弘です。お久しぶりです」とまず言い、私は突然の来訪をわびました。

武藤は顔を上げてややほほほ笑み、力のない、喉を痛めたようなかすれた声で、「ヨツちゃんか。見違えたのう」と言いましたが、また俯いて無表情にかえりました。

それは別人のような武藤でした。ある程度予想はしていたものの、しかし私の中には子供のころに親しんだ武藤の像がやはりあったのです。それは、どこか陰はあったにしても、二枚目で、たくましく、陽気に子供たちと遊んでいた若々しい武藤でした。しかし目の前にいるのは、頬のこけた、白髪之交じった短髪の痩せ細った男でした。かつて秀でていた目鼻立ちもあいまいにくすんでいました。

私はたちまち強引に押しかけてきたことを後悔しました。武藤に悪かったと思ひました。来る道中で多少は考えてきた言葉が皆色あせ、沈んでいきました。

「突然、すみませんでした。でも、兄ちゃんには一度会いたかった。子供のころ、よう遊んでもろたから」武藤のすぐそばに陣取る制服制帽の看守を気にしながら、私はかろうじてそう口に出しました。武藤はうなずくと少し顔を上げました。

「お父さんは、お達者か？」という小さな声がかぐもって聞こえてきました。

「ええ。父は何とか元気になります。手紙にも書いたように、役所を早う退職して、中古の船を買って島で漁師を始めたんですが、一年で音を上げました。身体が続かなんだようです。また陸おかに上がって、今は嘱託で市内の福祉施設で働いています。もう六十半ばやから、ここが悪い、あっちが悪い、といつも言うてますよ。でも、まあ元気におります」

「あなたのお父さんには、子供の時分からよう世話になってな。一度会ってお礼が言いたいんじゃないけど、それもでけん。あんたから、よう言うといってくれな」

それだけゆつくり言うともた武藤は黙りこみました。私の方も言うべき言葉に迷いました。看守があくびを噛み殺しました。私はますます深い後悔に襲われました。「シヤバのことは全部忘れました。私はあの日、死んだのです」と書き、またその通りの無表情を投げ出している武藤に戸惑いました。

「兄ちゃん、昔、お山のお観音さんに一緒に行つただろ。おぼえとるかえ？」と私が島言葉で突然言い出したのは苦し紛れでした。「あの時、兄ちゃんは本を書くつて言うた。調べてお観音さんのこと、空也さんのことがいろいろわかつたけん、それを本に書くんじゃつてな」

武藤はいくぶん顔を上げ、遠い目をしました。そしてかすかに笑いました。

「ほんなことな。おぼえとらんな。……本は……ヨッちゃんが書いたらええ」私はまた軽く落胆しました。

「……お観音さんはいつも念じとるよ。……ワシのようなもんには、もう何の望みもないが、母親の墓参りとお山へだけはもう一度行きたい。ほれだけじゃ」

話の接ぎ穂にすぎるように、「お咲おぼさんは、残念でした」と言つて、私は問われもしないのにお咲さんを老人ホームに訪ねた昔のことを話しました。そして、

「ほなけど、兄ちゃんは、お母さんと仲悪かつただろ？」と訊いてみました。

「ああ。……母ちゃんとは、よう喧嘩したなあ。憎んだ時期もある。でももう、そんなことはたいてい忘れてしもた。……今となつては、母ちゃんはええ人だつたと思う。母ちゃんもかわいそうな人でな。苦勞させたわ。ワシがこんなでな。ほんまにな」抑揚の乏しいかすれた声が、わずかに震えを帯びました。私も思わず胸を衝かれました。

武藤のそうした気持ちがかかる年齢に、私もなつていました。私の母についていえば、母は私を愛し得なかつたのですが、母もまた私と同じように孤独だったので。早く夫を亡くした祖母は、ただ一人の女の子だつた母を甘やかさず、厳しく育てたようです。長い戦争の時代で、祖母は一時期は子供の母を連れ、親類を頼つて大阪のT市に出て和裁の腕一つで世を渡つていかなければならませんでした。高等小学校を終えると、母が願つても上の学校には行かせてもらえませんでした。また、寡婦であつた祖母が男を家に入れるのに、母は少女らしく反発したこともあつたようです。私の母も、「母に愛されなかつた子供」だつたのです。そして「母に愛されなかつた子供」が母になり、わが子を愛せなかつたのです。ではその祖母はどうだつたのか。その前は……。親子の関係は閉ざされたものではなく、長く続く鎖の中にあるということ、そうした大きな流れの中では私の母もまた一人の孤独な存在にすぎないということ、年齢をとり、私も多少は理解できるようになつていたのです。

けれども、変な緊張のためか、私は次に、あらぬことを口走つてしまいました。

「兄ちゃん。こんなこと訊いたら、怒るかもわからんけど、ごめんよう。その、昔兄ちゃんが殺めた人な、お咲おぼさんに似とらんかつたかえ？」

武藤は顔を上げて私を見つめました。目に鋭い光が走ったようです。怒鳴られることを覚悟しました。同時に、自分は何という卑劣な、さもしい人間なんだと激しい自己嫌悪をおぼえました。ところがいったん閃いた武藤の瞳の光は急速に消えていったのです。武藤はまた視線を落としました。そして、

「さあなあ。ほんなことも忘れたよ、ヨツちゃん」とつぶやきました。

それから、ぽつぽつと話しているうちに、半時間の面会時間はすぐ過ぎました。去り際に武藤は私にあらためて遠来の礼を述べ、そしてこう言いました。

「ヨツちゃん。悪いが、もう手紙、書かんでくれ。あんたみたいに真面目にやっとする人が、ワシみたいなもんにかかわったらあかん。ワシもつらいけん」

武藤の皺がちの目のあたりが少し濡れていました。私の内にも突き上げてくるものがありました。兄ちゃんすみません、すみませんでした、と謝り、うつ向くと涙がこぼれました。

武藤が島で縊死したのは、それから三年ほど後の秋のことでした。たまたま実家に電話をかけたとき、父からそれを聞きました。私はすぐ島の幼なじみに電話をかけ、詳しい事情を聞きました。それによると、二週間ほど前に、武藤は定期船でふらりと島に戻ってきたのだそうです。すっかり老けて顔付きも体型も変わっており、それに片足を引きずるように歩いていたので、初めは島の者にも誰だかわからなかったのだそうです。武藤だとわかると、皆眉を顰め、腫れ物にさわるようにしていたのですが、誰かの「おまえ、もうお勤めは終わったんか？」という容赦ない問いかけに、「はい、おかげさんで。でも、私の犯した罪は一生消えませんが」と静かに答えたそうです。その笑わない痩せて尖った顔は、お咲ばあさんにそっくりだったといえます。

武藤はどこかで一夜を明かすと、翌朝いくらかの食料を漁業組合の購買部で調達してお山に出かけました。そしてお山のふもとの通夜堂の台所で自炊をし、夜はその軒下で寝袋にくるまって寝ていたそうです。通夜堂の中には宿泊の用意もあるのですが、参詣の人が薦めても武藤は決して通夜堂の中では寝ようとしませんでした。二、三度、集落に買い出しにやってきた以外は、そうしてずっとお山にこもり、修行の人のように観音堂の前やその裏手の崖の上で数珠を手に熱心に読経していたり、通夜堂の庭を掃き清めたりしていたそうです。ただ、島びとたちは武藤を気味悪がり、参詣を控えたり、またどうしてもお参りする必要があるときには男も複数混じって集団で出かけたりしたそうです。

峠地蔵からお山への道の途中に、崖の上をたどっていく、見晴らしのよい所があります。武藤の遺体はその近くの松林の中で発見されました。お山にも集落の中にも急に武藤の姿が見えなくなったので、これはもしやと島じゅう総出で山を搜索し、船も出て島の回りを探したそうです。島では昔から、行方不明者があるとそうする習わし

です。夕方、目のよい中学生が発見したそうです。「迷惑だったけんどのう。ほなけんどもあ、しまいに島に戻もってきて、お山のそばで死んだのはえらいところもある」と、私の幼なじみはそれが島の人々の代表的意見であるようにつけ加えました。

刑務所にいる間から、武藤はそのことばかりを考えてきたのではないかと私には思われました。いや、老女殺しの後、武藤は山に逃げ込み、うずくまっていたという、その時にもう武藤は自分自身を殺していたのかもしれない。老女がお咲さんの身代わりだとすれば、武藤は母親を殺してしまったのです。母親は自分の存在の根拠です。存在の根拠を殺してしまつたら、自分も生きていかれません。それではその後の二十数年は、武藤にとって無意味な余生だったのでしょうか？

この春、私は母を連れて久しぶりにお山に登りました。乳癌の手術をした母が、お札参りに行きたいと言っているのを聞いて、電話で私の方から誘ってみたのです。母はやや渋るようでしたが、最後には「それも、ええかの。世話になろうかの」と半ばあきらめたように言うのでした。

その日私は数時間をかけて車で実家まで行き、母を乗せて港まで走り、午後の連絡船に乗りました。あいにく春の嵐の余波で船はよく揺れ、灰色の海は私に子供のころの恐怖と島の遠さを思い出させました。その夜は父方の親戚がやっている旅館に泊まりました。

翌朝、まだ早い時刻に宿を出ました。戸外は前日の雨も上がり、気持ちのよい春の陽気でした。学校の裏の坂を上っていくと、まずタブの巨木たちが白く太い枝をくねらせています。小暗い中を山裾に沿って迂回し、谷沿いに出ると日の明るい道になり、やがて「大溜め」と呼ばれる貯水池のそばを通ります。そこを過ぎると左右から笹のかぶさる細い登りで、息を切らせながら行くと、ようやく峠の地蔵さんにたどり着きました。赤い衣をかけられた地蔵さんの前が、日が遮られ、風のよく渡る休み場で、木のベンチも据えてあるのです。

「あそこの畑はどうなったん？」と、私は腰掛けて顔の汗を拭いている母に聞きました。

「放つたらかしよ。おばあちゃんが死んでからは、世話する人もおらんでえ」

その地蔵さんから右手にゆるく登っている道は、島の最高所にある灯台に到ります。その途中の右手に、祖母が長年耕作していた畑があったのです。子供のころ、秋にはイモ掘りに、祖母や母や弟と来たものでした。集落からこの高みにまで祖母や母は下肥や水をかっいで登り、サツマイモを育てたのです。

そのころ若くて元気だった母は、もう目の前に老い、坂道を苦行のようにつらがつています。たまに会うたび、痩せて小さくなっていくようです。家族のために、いや自身が子供のころからすでに、自身のための楽しみは少なく文字通り寝る間も惜しん

でよく働いた母の手、その手の甲も皺だらけでしみが出ています。この母も、寡黙で忍耐強い、島の女の一人だったのでした。

回心というほどのこともないのですが、私も年齢を重ねるにつれ、母の人生を客観的に眺め、理解し、そして母の犠牲的な生き方の上に私たち家族の人生が成り立ってきた、自分もずいぶん恩恵を受けてきたのだと認められるようになってきたのです。きっかけは、労働ということへの私なりの気づきでした。むずかしいことではないのです。人は生きていくために働かなければならない。家族をもて自分がある程度は犠牲にして家族のために内でも外でも働かねばならない。それがどれだけ大変なことか。まさに私の母はそれをきびしく実践してきた人だった、と思います。

母や父が育ったのはこの国の軍国主義まった中の時代でした。きまじめな母はその時代の風を正面から受け止め、その中で自己を形成していかざるをえなかったでしょう。今よりもずっと男尊女卑の激しい時代でもありました。そのうえに漁師の島の貧しい暮らしの中で祖母から厳しくしつけられ、母という人の人格が定まりました。

戦後まもなく、朝鮮から引き揚げてきて島で漁師を始めた父と知り合い、結婚して子供が生まれました。私と弟です。父は島の他の男たちと同様、社交は大事にしても家事はいっさいしない人でした。家事はすべて女の仕事として母にまかされました。そんな親の間に育ち、私と弟も、学齢期になってもほとんど家事を手伝いませんでしたし、教えられないので無能でもありました。たとえば部屋の掃除や食後の食器洗いくらいは引き受けられたのに、引き受けなかったし、頼まれもしなかったのです。

私が生まれてまもなく、父は潜水漁業から足を洗って役所に勤め始めたのですが、役所の薄給では家族やかかりの親族の暮らしが成り立って行かず、子供たちが手を離れるころ、父に説得されて母も慣れない役所の職員になりました。それから毎日、母は家事と仕事の両方をこなしていかなければなりません。とくに島に暮らししていた私のいとこたち、母の甥と姪が高校に入って家の二階の部屋に下宿した数年間は、母の多忙は極まりました。

平日母は早朝五つか六つの弁当を作り、各人の食事を世話し、バスで役所へ働きに出、定時に終わって買い物をし、バスで帰って来るとそれから急いで六人分の夕食を賄いました。みなが順番に風呂をつかうと、最後に母が入ってうす高く積まれた汚れ物の洗濯をし、夜闇の中で庭の物干しに干しました。家族の季節ごとの衣類の管理も、家の掃除も、一人で引き受けました。それが連日続くのです。しかも母はきれいな好きで几帳面なので、家事に手を抜きません。毎夜睡眠はどれくらいとっていたのでしょうか。私には自分のためのみに時間を使っている母を見た記憶がほとんどなく、残っているのはいつも家の内外でなんらかに寡黙に働いている姿です。そんなふうに分けがかりに家事が押しつけられていることに母は、少なくとも子供の前では、一度も不平不満を洩らしませんでした。あのころ少しでも母の家事を手伝っていれば、という

のが、少しは家事ができるようになった現在の私の悔恨なのです。

家族のために自分が犠牲的に日々身を粉にして働くこと、母自身は犠牲的とは思っていないでしょうが、結局それが母の家族への愛情のかたちなのでした。また母の人生のかたちなのでした。そのような母に、その上に私は子供時代から多くを望みすぎたのかもしれない。

地蔵さんから急な坂を少し下ったところで、道は二手に分かれています。まっすぐ下れば八丁坂、右手に折れると三十三番の道です。どちらもお山に至るのですが、三十三番の道の方がなだらかです。私たちは数珠を手に、その道の左右所々に祀られている、西国三十三所の本尊を刻んだ石仏を順番に参っていきました。それぞれがちよっとした敷地を与えられた種々の観音菩薩たちは、光背を負って二段の台座の上に乗る、変わらぬやわらかな表情で参拝者たちを迎えてくれます。明治末年ごろの島びとの寄進になるもので、どの仏にも漂白されたような苔がこびりつき、もの寂びています。そのうちの一体の台座には、寄進者として祖母の義父の名も刻まれていました。

私はかつて何度も祖母と、満ち足りた気持ちでこの道をたどりました。子供のころ、秋には椎の実やアケビを目当てに学校帰りによく遊びに来たこと、そして武藤にまわりながら歩いたことも思い出されました。二月中旬のまだ寒いうちの観音さんの祭礼の日には、島の老若男女がこぞってこの道をたどります。お山に参り、ふもとの通夜堂の境内で餅投げや相撲やの遊びに興じるのです。境内には露店も出て、人がいっぱいでした。その祭礼の日に、母の姿を見失ったのが、私のこの道の最初の記憶です。まだ四、五歳だった私は泣き惑いました。鬱蒼とした見知らぬ山中に一人放り出された気がして、人目もはばからず泣きながら右往左往して母を捜しました。その時のどうにもいたたまれなかった怖れと悲しみを、自分の存在の原風景のように今でもおぼえているのです。

しかし、この道を通る人は、過去の自分だけではないのでした。木々の間を、母は背中に木漏れ日を映しながらゆっくり進んでいきます。その母の先にも、また私の後ろにも、たくさんの人が歩いているのでした。大勢の行列の中に、祖母もいます。武藤もいます。お咲さんの顔も見えます。列は祭礼の日よりもさらにぎやかに、切れ目なく長く続いているのでした。その先頭には、僧形の若者の顔が見えます。ぼろぼろの着物を身にまとい、念仏を唱えています。苦しい表情です。

何だか、詩人の詠った、あのステーション島の巡礼の光景に似ています。「ショールを掛けた一群の女たち」がスカート下の擦れる音をたて、「我らのために祈り給え、我らのために祈り給え」と呪文をかけながら通り過ぎていくのです。するとたしかに、日の光はおだやかに満ちていても、「朝は悲しみに沈む」のです。そして巡礼者ばかりでなく、そこそこに昔の今の「うろ覚えの顔が溢れている」のです。

松林の中に、太い枝からだらりと垂れ下がった人も見えます。武藤のようです。で

もまた武藤はあの僧形の人について、お山へとたどってもいるのです。

ここは観音浄土、補陀落。いや、補陀落かどうか。しかし、そんなことはもうどうでもよいのでした。誰がそれを決めるのでしょうか。島は島なのでした。千年の昔に、空也という名の若い僧が実際にこの島にやって来たかどうか。それも私にはもうどうでもよいことでした。今までもそうだったように、やって来たという伝えさえあればそれで十分なのです。クーヤシヨーンは今も先を歩いています。私は本を書くかどうか。いや、そんな必要はない。武藤も書かなかったのですから。

見晴らしのよい場所に出ました。松の木の作る陰で私たちは休み、持参のポットのお茶を飲みました。東方の海を眺めました。大洋の向こうがかすんでいます。目の下はるか下の岩に白波がくだけ、波音が這い上がってきます。潮の香をふくんだやわらかな春風が渡り、木漏れ日が土の上にも、疲れた表情の母の顔の上にもかるやかに踊っています。

*作中シェイマス・ヒーニーの詩の引用は、村田辰夫氏ほか訳『シェイマス・ヒーニー全詩集 1966〜1991』によった。